

宗教講話 (其十二)

大川 周 明

マホメット教の成立は、基督教に後ること六百餘年であるけれど、その發達の程度より云へば、殆ど舊約のイスラエル宗教と同一段階に在るものである。最初余は基督教を述べ終へた後、直ちに佛教に及ぶ計畫であつたが、教義の高下信仰の純雜は兎に角として、既に二億の信者を有する世界第三の大宗教である以上、その教祖の生涯と、教義の大綱とを略述するのが至當と思ひ直して、茲に舊稿「マホメット及び其宗教」を兩回に亘りて掲載する事にした。

マホメット及び其宗教

一 マホメット以前の亞拉比亞

亞拉比亞はセム民族の故郷なり、而して其民は夙に此の荒蕪たる故土を去りて北方小亞細亞の地に出で、東方はイランの高原に至り西方は地中海の沿岸より阿フリカの北海岸に至る一帯の地に分布しシリヤ人、アツシリヤ人、フェニシア人、カナン人、イスラエル人等の諸種族に分れ、或は其の宗教を以

て、或は其の經濟的活動を以て、それ〴〵世界の文明に至大の貢獻をなせり。然るに獨り亞拉比亞の故土に残れる亞拉比亞人のみは、茫茫たる砂漠によりて自餘の世界と隔離せられ、單調なる自然と酷烈なる風土とに咀はれつゝ、長く文化の發展を妨げられ、遙かに後代に至るまで世界史の舞臺に於て何等の役割をも勤めざりき。さればマホメット以前の亞拉比亞人の生活はセム民族の原始的社會狀態を彷彿せしめ、概ね遊牧を事として、天幕の中に住し、水草を追ひて各自の部落内を轉々遷移したり。たゞ少數の民の都市に定住して商業を營むあり、隊商を組んで、シリヤ、エーメン、及び波斯灣岸に至る間を往來して通商を事とせり。

(4525)

の子孫なりとの古き傳説を有せしにも拘はらず、當時の亞拉比亞人は未だ國民的自覺を生ぜざりしかば固より國家組織を有せず、たゞ血族關係によりて結ばれたる幾多の部族に分れ、血を以て血に報ゆ可しとの残酷なる不文律ありて、各部族の間には曾て復仇私闘の絶ゆる事なかりき。唯だ毎年二回一ヶ月間の聖期に於て一切の争闘を中止する習慣あり、固これ宗教上の風習なりしが後に其の宗教的意義を失ふに及んでも尙ほ極めて嚴重に格守せられたり。されば一度び此の聖期至るや、亞拉比亞の天地は忽然として昌平無事の樂土と化し、昨の仇敵も互に其手を握り、或は相會して美酒を仰ぎ美人を擁して強烈なる歡樂に酔ひ、或は相携へて聖地を巡禮し、砂漠の隊商も亦掠奪の難を免れて安んじて其の駱駝を追ふを得たり。然れども聖期幾くもなくして去れば、好戦慄悍の民は直ちにまた劍戟を提げて起ち、烈日の下に悽愴なる叫喊を擧げつゝ、漠々たる熱沙を鮮血

に染めて、再び茲に慘憺たる修羅場を現出せり。是の如き社會的事情の下に在りて婦人の地位が奴隸と擇ばざる迄に卑かりしは怪しむに足らず。離婚の如きは男子の意の儘に掌を翻すよりも容易に行はれ、女兒の誕生は災厄として呪咀せられ、甚しきは生き乍ら埋葬し去られたり。而してセム民族に通有なる種族的感情は亞拉比亞人に於ても極めて強烈にして、若し一部族に屬する者が他部族に屬する者の爲に辱しめらるゝ事あれば、全部族を擧りて之が爲に最も残酷なる復仇を圖れり。蓋し此執拗にして強烈なる種族的感情は亞拉比亞の地をして不斷に私闘の修羅場たらしむる至大の原因なりし也。

而して亞拉比亞人の宗教はまた最もよくセム民族の原始的宗教形式を傳ふるものにして、各部族には皆々夫々の祖先として崇拜せらるゝ部族神あり、一部の部族に屬するものは生れ乍らにして其の部族神との間に血縁を有すと信せられたり。されば神人の關

(4526)

「道」第65号(1913.9)

係は極めて親密にして、神は其の部族が企圖する一切の計畫の指導者、其の部族が享有する一切の幸福の守護者、其の部族が奉行する一切の行為の監視者たりき。是の如く亞拉比亞人の宗教に於ては、其の宗教的教團を成すものが多くの他の原始宗教に於て見るが如く家族に非ずして部族全體なりしが故に、その供儀の式の如きも之を一家團樂の爐邊に於てすることなく、唯だ神在りと考へられたる土地、若くは神體を表はす聖樹または聖石の下に於て之を行へり。而して最も普通に神格のシムボルとして用ゐられたるは直立せる石柱にして、供儀の式は現前に屠られたる犠牲の鮮血を此の石柱に瀧ぐに在り。而して供儀の式終れば全部族相會して犠牲の肉を頰ち食し、置酒して盛大なる饗宴を張り、神も亦其宴に列なれりと信じ高歌歡舞して歡を盡せり。

この部族神の外に亞拉比亞の宗教に於て最も注意す可き神格をアラ―となす。アラ―は自餘の諸神の

如く亞拉比亞の歴史的な神格に非ず、また當初より神の固有な名に非ず、固とこれ主長てふ意味の普通名詞にして、總ての亞拉比亞人は其の崇拜する神を呼ぶに皆なアラ―の名を以てせるなり。而して是の如く各部族が皆なアラ―の名を以て其神を呼べる間に、アラ―は亞拉比亞人の全部族に通ずる一大神格の名となり、遂に世界の創造者たり且支配者たる天主として崇拜せらるゝに至れり。然れどもマホメト以前に在りては、アラ―は畢竟思想の上の神たるに止まり、亞拉比亞人の實生活に對する勢力は殆ど皆無なりしと云ふも可なり。これ蓋しアラ―が歴史的な神格に非ずして全く抽象的に寫象せられたるものなるに由れり。

亞拉比亞人はまた多くの女神を有せり。固と亞拉比亞の社會は自餘のセム民族の社會組織と同じく、母長制度始めに起りて父長制度之に次げるを以て、太初に於ては唯だ女神のみありて未だ男神を有せざ

りき。然るに家族制度の變遷と共に専ら男神を崇拜するに至り、母長制度の行はれし太古の時代に出でたる多くの女神は次第に其の宗教上の實際的勢力を失ひたり。唯だアルラート、マナート、エル・ウツサの三女神はマホメットの時に至るまで人民の尊信を受けたり、而して天體崇拜も亦亞拉比亞に於て極めて夙くより行はれたる事は、太陽神トウサレスの男神なるを除きて、自餘の星辰が多く女神として寫象せられたるに由りて知るを得べし。隕石崇拜も亦天體崇拜の一變態にして、就中その最も歸依を受けたるをメツカに於けるカーバの隕石となす。こは直徑約七寸の隋圓形を成せる黒色の隕石にして、アブラハムが天國より將來せる窟にかゝり、もと白色なりしを罪業ある者の接吻するによりて黒色となれりと傳ふ。而してカーバとは固とこの隕石の名なりしが後には之を奉祀する小祠の名稱となり、アブラハムイシユマエル以下の諸神の偶像を此處に併せ祀るに

至りしかば、メツカは亞拉比亞に於ける至聖の靈場となり、メツカ参拜は亞拉比亞の公事として重んぜられ、常に各部族よりする巡禮者の蹤を斷つ事なかりき。

以上の外に亞拉比亞人はアラ―の女として天使を信じ、またジンと呼べる神格をも信じたなり。ジンは善惡の精靈にして、多數の學者に従へば固と自然力の神化せられたるものなり。而して其數甚だ多く諸種の形狀を取りて諸所に現はれ、就中蛇の形を以て現はるゝこと多し、此等と相並んでト占及び魔術の如き迷信が最も弘く行はれ、呪物崇拜も亦極めて盛んに行はれたり。

マホメット出現前後に於ける亞拉比亞の宗教界は眞に混沌を極めたり。即ち如上の諸信仰が雜然として並び行はれたる以外に、エルサレム没落以後猶太人の亞拉比亞に移住せるもの甚だ多くして其教會の各地に散在するあり。またネストリウス派、アリウ

ス派、サベリウス派の如き基督教の所謂異端派が沙漠の自由を慕ひて亞拉比亞の地に入り、多かれ少なかれ變形せる信仰を以て土民の間に感化を及ぼせるあり。而して此等の比較的純一なる信仰に刺戟せられて墮落せる亞拉比亞の宗教を厭離せる一團の宗教家をハニーフとなり。ハニーフとは懺悔者の意味にして、亞拉比亞在來の多神教を排斥し、嚴格にアラの一神を崇拜せる出世間的修行者なり。是の如くにして亞拉比亞の教養ある社會は、其の内面より來れる要求と、外部よりせる刺激とに由りて、新しき

船幽靈の實驗談

坂本喜太郎

(未完)

化物の正體見たり枯尾花
右者古人の句であるが、化物存在説を打ち消すには至極都合よい材料だと思ふ、歳替り星移り、今や

御代泰平の世となつて、化物も何時か其貌を隠す様になり、従つて、
幽靈を見る奴己が迷て居

と猫も杓子も異口同音、一言の下に幽靈を非認する様になつて來た、併し世は如何に進歩しても、有るものならば幽靈は決して現はれざるを得ないのが真理である。

近來歐米文明國を始め、現に吾が日本でも心靈的研究が次第に進歩發展する風潮を成して居る様に思はれる。

心理學等を繙きて見ると、其中には幽靈の寫眞を出してあるものがある、予は以前幽靈存在説を非認したものであるが、其後聊か心靈上の實驗を認めてから爾來俄に趣味を此點に有する様になつた。

今夏息心調和法及心靈治療法研究の爲め、東都養眞會本部へ出張した折、松村介石先生を大森の邸に訪づれ、談たましく心靈上の話より、予が曩に實驗せる船幽靈のことに及びしに、先生には、是は面白い、暇の折り一つ書いて見て呉れよとの仰であつた其後歸名してから又手紙もて、彼の事を是非書いて

力ある信仰を翹望せり、而して此の希望を満足せしめんが爲に出現せる亞拉比亞のメシヤをマホメットとなす。人或は回教の弘通の餘りに急速なりしに驚かん。されど何事も準備なくして現はるゝものに非ず、半島の精神界は根本的に動搖して、徹底せる宗教的並に道德的革命的の要に迫られつゝありしなり、田は己に耕やされたり。而してマホメットは、耕やされたる田に種を蒔けり。長養の迅速なりしは自然の理のみ。

送れと態々申越されたが、兎角多忙に打ちまされ、此約束を果たさで居たところ、此れより雑誌に又々心靈的現象のことを出すからとの御催促により如何にも相濟まず、茲に寸暇を偷み漸く此稿を綴ることとしたが、遺憾の事には之を校訂する暇がなく、従つて杜撰の點が多いのは、先づ御詫び申す次第である。

時は明治三十年仲秋の月夜、處は豫州宇和島灣内野島近海であつた。丁度此仲秋の頃は一本釣と稱へて鯛、金線魚等を釣るに最好き季節である、殊に仲秋は俗に月夜釣と稱へて明月の下に釣魚の催をなすのであるから、それは却々興味深い遊である。其處で此夜吾等同勢三人のものども、それく用意を調へ、もと伊達家の召使であつた老練の船頭を頼み、愈々一夜の清遊を試むることとなつたのである、清風徐ろに來つて水に波なく、明月遙に東山に懸り、皎々として白晝を欺く計り、船中快談湧き、